

## メロンの着果剤に関する研究

北嶋秀臣・西本 太・石田豊明・古田勝己

(熊本県農業試験場)

KITAZIMA, H., NISHIMOTO, F., ISHIDA, T. and FURUTA, K.

Studies on the Fruit Setting of the *Cucumis Melo* L.

プリンスメロンにおいては、作型が前進したため着果期の環境が不良となり、生産上十分な着果が得られていない。そのためホルモン剤にたよる傾向がつよく、近年一部ではホルモン剤の混合処理が行なわれるようになったので、この点について検討した。

## 試験方法

プリンスメロンを供試し、1月15日は種、3月3日定植、4月10日、17日の間処理を行なった。ホルモン剤の調整および処理方法をつぎに示す。

- (1) G・N・C (ジベレリン5,000倍, ナフサク200倍, トマトレーン 100倍になるように混合した液の開花期および開花前子房塗布処理)
- (2) D・N・C (2,4-D50,000倍, ナフサク200倍, トマトレーン 100倍の混合液の開花期および開花前子房部塗布処理)
- (3) G・D (ジベレリン 5,000倍, 2,4-D50,000倍の液の開花期および開花前子房部塗布処理)
- (4) N・C (ナフサク 200倍, トマトレーン 100倍の混合液の開花後噴霧処理)
- (5) NAA (ナフサク 200倍液の開花後噴霧処理)
- (6) BA (ベンジルアデニン500倍液の花こう部塗布)

## 試験結果および考察

着果率は人工交配>G・D>BA=N・C>D・N・C>G・N・C>NAAの順に高かった。収穫率(C/A)は人工交配>G・D>D・N・C>N・C>BA>NAA>G・N・Cで、(C/B)は人工交配>NAA>D・N・C>G・D>BA>G・N・C>N・Cの順であった。

収量はG・Dと人工交配が高く、その他の処理区は低かった。一果平均重は株当たりの着果数との関係が高く、着果数の少ない、G・N・C、N・C、D・N・C、NAAなどが高かった。

以上の結果から、着果率、収量ともにすぐれていたのは、人工交配区に次いで、G・D区であった。処理時期が4月中旬でかなり条件としてはよかった

め、人工交配区が好結果を示したものと思われるので、もう少し早い時期での検討が必要と考える。G・D区については、供試ホルモン剤のなかでは最高であったが、混合濃度についてはまだ検討の余地があり、処理の時期とあわせて、適正な混合濃度のは握が必要と考える。なおジベレリンが混合されていると湿展性があり、処理が非常に容易である。処理花のステージについては未検討であるが、開花前でも効果があるようで、処理労力の省力化にも大いに期待できるものとする。

第1表 着果率

処理区	処理花数 (A)	着果数 (B)	取穫数 (C)	着果率 %	C/A %	C/B %
(1) G・N・C	424	161	33	38	8	20
(2) D・N・C	301	121	53	40	18	44
(3) G・D	533	289	115	54	22	40
(4) N・C	226	116	39	51	17	17
(5) NAA	163	35	16	21	10	46
(6) BA	222	114	28	51	13	25
(7) 人工交配	291	203	107	70	37	53

第2表 収量

処理区	株当たり収量		一果重	a 当たり収量 (50株)	比
	個数	重量			
(1) G・N・C	2.2	1,077 <sup>g</sup>	490 <sup>g</sup>	54 <sup>kg</sup>	41
(2) D・N・C	3.5	1,655	468	83	63
(3) G・D	7.7	2,773	362	139	105
(4) N・C	2.6	1,257	484	63	48
(5) NAA	1.1	497	466	25	19
(6) BA	3.5	1,359	370	68	52
(7) 人工交配	7.1	2,641	384	132	100